

保育者養成課程における表現教育教材の可能性

—『保育内容演習』の絵本を用いた実践から—

ガハプカ 奈美

(教育学科教授)

1. はじめに

保育内容で示されていた「音楽リズム」と「絵画製作」は平成元年の幼稚園教育要領の改訂および平成2年の保育所保育士指針の改訂により、子どもの発達からの視点をもって捉えなおされ、音楽や絵画を育む感性の表現に関する領域「表現」として大きく見直された。このことで、「音楽」と「造形」は、現場でいかに育むべきか問い直すきっかけとなった。平成20年改訂の幼稚園教育要領および保育所保育士指針における領域「表現」のねらいと内容に強く引き継がれている。

本来、子どもは様々な身体感覚を伴った経験から蓄積されたイメージを、身振りや音声や色や形などを総合的に用いながら自分なりの方法で表し、伝えようとするものである。そうした子どもと関わる保育者に求められるのは、子どもに豊かな感性が育つように環境を整え、子ども自身が独自の方法を用いて表現する楽しさを味わえるように働きかけ、総合的な子どもの表現を受け止めてゆく力である¹。

この間現場や諸課程教育機関では様々な工夫が行われいかに人の「表現」を育むか検討が重ねられている。最初の改訂から30数年経つが、現場では子どもの総合的な表現活動を育む指導の方向性が明らかであるとは言い難く、領域「表現」に関しての形態が未だ「音楽」と「造形」で分断されている状態が続いている。

このような問題を背景に「表現」、「表現教育」という言葉も現場から一般に至るまで定着し、小学校学習指導要領においても幼児期に育まれた感性や表現の力を小学校教育へと円滑に

接続されるような学びへ繋げることが求められている。

そこで本稿では、子どもにとって身近で総合的な表現媒体である絵本を用いて2013年から行ってきた児童学科2回生の「保育内容演習」の授業について筆者の授業内容と学生の発表の分析をもとに、表現における教材の可能性を探ることを目的とする。

2. 授業の実践—授業内容の分析と考察

〔授業名〕

保育内容演習（音楽表現）

〔期間〕2013年から2019年うち前期（4月から7月）

〔授業の対象〕京都女子大学児童学科2回生（必須科目）

〔各授業内での人数〕30名前後

〔授業内容〕（本授業は全体で15回授業。（教員2名で担当しているが、本稿では、筆者担当回全7回の内容を記す）

各回の内容

第1回 呼吸法

第2回 言葉の高低

第3回 絵本の中のオノマトペ

第4回 絵本と言葉

第5回 絵本と動き

第6回 絵本の音・色・形

第7回 表現活動（グループ発表）

第1回の授業内容から

(1) 呼吸法の体験—自分を見返る

- ①自分の呼吸を知る
 - ・1分間自分の呼吸だけに集中して呼吸をする。
 - ・中心呼吸を体験する。
 - ・2人組になって背中合わせで呼吸をする。
 - ・2人組の相手の背中に両手（掌）をあてて、相手の呼吸を感じる。
- ②呼吸と身体の連動を感じる
 - ・ボールがきれいな弧を描くように「おい」と言いながら相手に届くようにボールを放る。
 - ・ボールは前回と同じ弧を描くように放るが、声は「おい」と短く発し、ボールが相手に届くように放る。
- ③呼吸に母音のをせる
 - ・母音（あ・い・う・え・お）の舌の位置を確認後発音する。
- ④様々な呼吸を考える
 - ・「おはようございます」を発するときの呼吸を順を追って考える。（複数の子どもへ向けて・目上の人へ・保護者）

〔授業のねらい〕これまで意識していなかった「呼吸」に着目して、自己の表現能力を向上するための呼吸法を学ぶことにおいた。

〔授業内容の分析と考察〕

①の活動に15分程度当てた。呼吸に関して「気づき」を得る時間としては十分であるとは言えないが、学生たちは、これまで経験したことのない感覚を確認することが出来た。特に2人組になって相手の呼吸を感じる体験は、安心感へと繋がり、リラックス効果をもたらした。この感覚こそ、自己表現能力を十分に引き出すための空間としてふさわしいものであると感じられた。

学生たちの振り返りコメント（以下学生の記述のまま）には、「呼吸をするってこんなに気持ちが良いことなんだと初めて知った」「友人に手をあててもらったらとても気持ちが良くて、あたたかくて、眠くなった」など、「呼吸する」

という当然の行為に対して普段の無意識に気づき、呼吸に集中する体験によって身体の開放感を味わったという記述が多かった。

また、学生たちのコメントには「呼吸を整えるだけで、緊張しなくて済んだという事が分かった」「呼吸ってすごい」などの記述も見られ、一度の授業であったが、本質に気づき、筆者のねらいとする要件を受け止めることが出来た学生もいた。このことは、人の表現活動へ呼吸法を用いることの妥当性、有効性を示唆するものであろう。

第2・3回の授業内容から

(1) 言葉の高低を知る

- ①普段からよく使う単語の高低を考える。
 - ・ワーク①を用いて自分の単語の高低と標準日本語の高低を比較する。
 - ・母音と子音の特徴について学ぶ。
- ②絵本を用いて学ぶ（これまで使用した絵本をそれぞれ記す）

第2回授業のねらいは、第1回からの流れも受け、①無意識にしていることを意識すること②絵本の中に出てくる動きや場面を擬態語に置き換えて思い浮かべることが出来ることの2点においた。

〔これまで使用した絵本〕

2013年：「あるひこねこね」高島邦生作 好学社出版

（内容）ある日、ある星に宇宙人がやってきて何かを「こねこねこねこね…」作り始める。こねこね唱えていると出来上がったのは「ねこ！」次は「ぬいぬいぬいぬい…」「いぬ！」と様々な言葉遊びをしながら、よく知っている動物が出来上がる。

2014年：「詩の絵本」マーガレット・ワイズ・ブラウン作 レナード・ワイスガード／絵 木坂涼／訳 フレーベル館

（内容）自然を詩にしたもので、身近なもののばかりである。最後のページにある詩の終行には「…略…ことばの おんがく ことばの うた」

とある。

2015年：「詩の絵本」（同上）

「へんしんトンネル」あきやま ただし作・絵
金の星社

（内容）ページには大きなトンネルが描かれ、このトンネルをかつぱが「かつぱかつぱかつぱ…」と唱えながらくぐると、ぱっかぱっかぱっかあら不思議、馬がかけ出てきました。というような言葉遊びが楽しい絵本である。

2016年～2018年：

「ぼちぼちいこか」マイク・セイラー作 ロ
バート・グロスマン絵 今江祥智訳 偕成社

（内容）見るからにのんびりでおっとりしたカバ君が色んな職業に挑戦して「こらあかんわ」とことごとく失敗する。カバのそのユーモラスな姿と表情が愛らしい。最後までへこたれず「まっ一休みしてぼちぼちいこか」で乗り切ります。

カバの言葉が関西弁で訳されており、言葉の高低を考えるに適した絵本である。

2019年：「ぼちぼちいこか」（同上）

「ぐぎがさんとふへほさん」岸田衿子作 にし
むら あつこ絵 福音館書店

（内容）角ばってごつごつした「ぐぎがさん」と丸くてふわふわした「ふへほさん」のごつごつふわふわな日常を描いた楽しい絵本。本文内では唱歌〈うみ〉も歌われる。

「あいうえおうさま」寺村輝夫作 和歌山静子
絵 理論社

（内容）あいうえお五十音を、おっちょこちょいなおうさまと一緒に文字と言葉そしてリズムが同時に楽しく学べる絵本。

- ・絵本を用いて言葉の高低を知る。
- ・絵本を用いて言葉の持つ音の特徴を知る。
- ・絵本を用いて言葉のリズムを感じる。

〔絵本の選定理由〕

これまで第2回授業に用いてきた絵本は、本授業のねらいに基づき、①普段の生活に密着した言葉が出てくる ②擬態語を思い浮かべやすい、の2つの授業内容を行えるよう、絵本の選定をした。

〔授業内容の分析と考察〕

「あるひこねこね」では、内容紹介にあるように宇宙人が突然我々の住む地球にやってくる設定となっている。表紙にも不思議な宇宙人の絵が描かれており、学生たちは表紙を見ただけで、口々に感想を述べるなど絵本に興味を示した。ページをめくっていくうちに、「次は〇〇（動物の名前）やな！」等予測をして楽しむ様子が見られた。また、「こねこね…のこを強く言えば、ねこねこ…とはならないよね」など言葉の高低に気づく学生もいた。

「詩の絵本」は、落ち着いた雰囲気のある絵本であるので、静かな環境で一場面ごとに描かれた絵から感じることを見出すために適切であった。学生たちからは、「絵本の中に出てくる昆虫や、動物に変身した気分になった」「自分がこの大きさ（昆虫）で草むらにいたら人間の出す音がどんな音にきこえるのだろう…と考えさせられた」など、絵本は小さな子供のものであるというようなイメージを払拭する一冊になった。

「へんしんトンネル」は、学生たちも良く知っている、あるいはパネルシアターを作成したことがあるくらい内容を理解している一冊であったが、本授業のねらいである、無意識を意識的に変えたり、絵本の場面から思い浮かぶ擬態語を具体化したり、これまでと違った視点での捉え方に学生たちは、大きな興味を示した。2013年に用いた「あるひこねこね」と同種のねらいをもって選定したが、学生たちは、「次は〇〇がトンネルから出てくるよ。」「こんな風にアクセント付けたら〇〇にはならないね。」など本授業でのねらいをしっかりと受け止める事の出来たものが多かった。

「ぼちぼちいこか」は、1980年の訳本の絵本で、関西弁でその訳が書かれている。日本で初

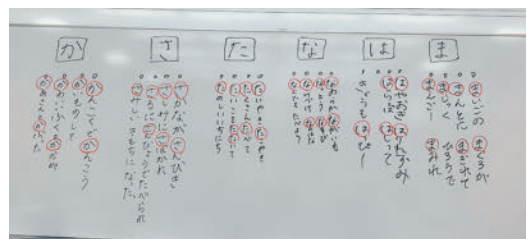
めて関西弁で書かれた絵本であるⁱⁱⁱ。

本絵本では、より音楽と言葉の結びつきについて考えられるような授業展開を試みたⁱⁱⁱ。また、本時のねらい①に掲げたように普段の生活に密着した言葉が出てくるという事を更に意識できるように、本文すべてを関西弁から標準語へ書き直して、標準語を本文として絵本を読んだ場合の主人公の表情の違いについて考えた。関西弁を普段話し慣れている学生にとって、標準語へ書き直すことがとても難しかったようだったが、学生の中には、関西弁を話さない地域の者もいたため、「私の住む地域（方言）では〇〇のように言うよ」「言葉の高低が真逆だね」「いつもと違う高低で言葉を発すると変な感じがする」など第1回、第2回授業で行った内容を深く捉えた感想を述べる学生が多かった。このように学生たちが自ら気が付いた事で、自分が普段どのような方言を話しているのか、その環境について意識を向けられたことがわかる。

「ぐぎがさんとふへほさん」は、発音の面白さを発見する^{iv}ために選定した絵本である。我々は普段「ひらがな」が母音と子音で出来ていることを意識していない。しかし、本授業展開のように、意図的に印象を比較したり検討したりすると、それぞれの行には、それぞれの音の雰囲気があることに気づく。また、本文では、唱歌〈うみ〉をぐぎがさんとふへほさんがそれぞれの行で歌う場面がある。これを本時では、自分の名前の頭文字の行に置き換えて歌唱することで、より一層ひらがな一つひとつに対して意識し、行の持つイメージを味わうことが出来た。学生たちからは「個人的に〇の行が好きだと感じた。自分の名前の行ではないので少し残念…」 「さ行はすしという単語が聞こえてくるので〈うみ〉とさかなつながりがあるな、と思った」「た行では、たたた…という感じで何かを叩いているようなイメージが湧いた」「な行はぬるぬるしているイメージがする」「こんなにひらがなに特化して考えたり、発音したりしたことがなかったけど、音って面白いと思った」「普段何も考えずに話している言葉だけど、こんな風に、母音と子音に分解してみると言葉

では無いように感じた。でも、母音が一緒だから何となく何を言っているのかわかるのが不思議だった」など普段話している言葉そのものではないが、音によって（特に母音）登場人物が何を言ったのかわかることに気づくことが出来るようになった。このように普段は無意識に使用している「言葉」について自分なりのイメージを持ち発音することの重要性を見出した学生も多かった。

「あいうえおうさま」は、いろいろな文字数の言葉で、拍やリズムを感じ取る^vために選定した絵本である。まず絵本を声に出して皆で一斉に読むと、自然と手・腕で本文に合わせてリズムをとったり、指で数えたりしながら音読し始めた。読み終わると、「数に何となく決まりがあるよね」と学生間での気づきが得られた。そこで、その「決まり」を見出そうとグループで話し合いをした。その後に、「か」「さ」「た」「な」「は」「ま」行で同じようにリズムよく言葉をグループで考え、板書し声に出して全員で読む活動へ繋げた。（写真1、写真2）



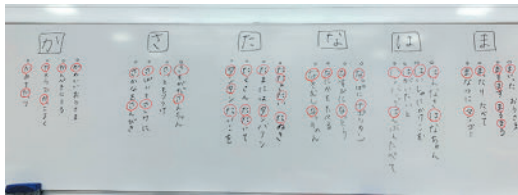
（写真1）「は」行に難しさを感じたクラス

「か」 かんこくで かんこう
かいものして
かわいいふくを かったが
かあさんと かぶった

「さ」 さかなが さんびき
さしみに さばかれ
さるにさんびょうでたべられ
さみしいきもちになった

「た」 たいやき たこやき
たくさん たべて
たいこをたたいて
たのしいいちにち

「な」なめらか ながいても
なっとう なすび
ならづけ なのはな
なんでもたべよう
「は」はやおき はりねずみ
はらっぱ はしって
きょうもはっぴー
「ま」まいごの まぐろが
まんとに まぎれて
まじっくひろうで
まんごー まみれ



(写真2) リズムよく考えられたクラス

「か」かめを かって
かめらで かっこよく
かんぺきにとる
かわいいおうさま
「さ」さかなを さんびき
さばいて さしみに
さっともりつけ
さすがだ さえちゃん
「た」たんたん たいこを
たくさん たたいて
たまには たんぱりん
たたきたい たぬき
「な」なきむし なっちゃん
なにかをたべる
なすびに なっとう
なっぱに なぼりたん
「は」はんぱーぐ はんぶんたべて
はがいたいと
はいしゃにかけこむ
はんなき はなちゃん
「ま」まなつに まんごー
まったりたべて
ますます まるまる

まいったおうさま

以上のように2クラスで考えられた言葉を書き出した。板書にはカタカナも出てきたが、ここではひらがなで示した。

写真1のクラスでは、「は」行を考えることに難しさを感じ、時間内に3文のみ考えることが出来た。また、どちらのクラスにも同じ言葉が出てくる「さ」行、「た」行、「な」行は、本絵本の前に使用した「ぐぎがさんよふへほさん」の唱歌〈うみ〉で自分の名前の行に置き換えて歌唱したことで、本時で言葉のリズムを考える際、行のイメージから言葉を想起したものと考えられる。

このように、それぞれの絵本にかけける時間は多くはなかったが、筆者が授業のねらいのひとつである、①無意識にしていることを意識することを、普段の生活に密着した言葉が出てくる②擬態語を思い浮かべやすい絵本を順序よく選定することにより、学生たちは、自分の「普段の生活」に意識を向ける体験が出来たと考えられる。

第3・4回の授業内容から

(1) 絵本の中のオノマトペ

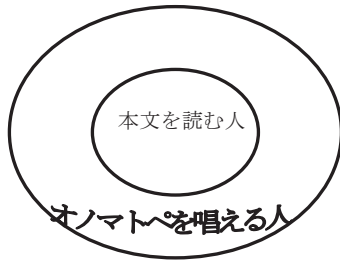
使用絵本「あさになったのでまどをあけますよ」新井良二作・絵 偕成社

①絵本の中にあるオノマトペを想像する

- ・6グループ(4～5名)に分かれて数場面について窓を開けている主人公を確認したのち、どのような音を聴いているかそれぞれ話し合う。
- ・各グループで出てきた音を場面に適当なオノマトペに置き換える。
- ・絵本のBGMとしてどのように発表をするか話し合う。

(2) 絵本の立体化

- ・全員で円(図1)になり、内側を向いて座る。絵本を回し読みしながら、オノマトペを唱え、絵本の場面をより立体的に感じる。



(図1 絵本の立体化を図るための並び方)

〔授業内容の分析と考察〕

ここでは、「あさになったのでまどをあけますよ」を用いて、音を表す言葉の世界を広げる試みを行った。まずクラス全員に対し筆者が読み聞かせる。その際、以下3点に着目しながら読み聞かせを聞くよう指示した。

- ①窓をあける主人公が描かれているか
- ②主人公はどこに描かれているか
- ③具体的な「言葉」を考えずオノマトペを感じて言語化すること

各クラスで4グループに分かれ、一場面ごとに絵本の場面の中に居ると想定して、聞こえてくる「音」をオノマトペに置き換える作業に移った。学生が感じて言語化したオノマトペは以下である。(表1、表2)

表1及び表2の下線部は、共通して「鳥の

(表1) クラスAのオノマトペ (下線筆者)

| | |
|--|---|
| 第1場面 さわさわ ばん とんとん <u>ちゅんちゅん</u> ざー | 第2場面 さー ひゅー ちょろちょろ ごー (雲の動く音) <u>かあかあ</u> |
| 第3場面 がたんごん ぶーぶー ざわざわ ごー さわさわ | 第4場面 ぶーん がーっ とことこ びっぽびっぽ しやー |
| 第5場面 ぶーん きい わんわん さわさわ <u>ちゅんちゅん</u> | 第6場面 ぶるるるん しーん ごー ぶおんぶおん めえええ |
| 第7場面 さわさわ ぎらぎら かたかた どおん みーんみーん | 第8場面 がしやん じーじー びょーん かさかさ みーんみーん |
| 第9場面 さー とうつとうつ げーこげーこ ザヴァ びょーん | 第10場面 とんとんとん かちやかちや ちくちく ちーん すー |
| 第11場面 すー さー ざっざっざっ さぶーん さわさわ | 第12場面 ぶー ざー ばかばか さわさわ ちりんちりん |
| 第13場面 さぶーん <u>びーびー</u> さー きらっきらっ うーん | 第14場面 ぶろろろろ そよそよ かちやかちや ざー <u>ちゅちゅちゅ</u> |
| 第15場面 ぶあーん たたたたたっ ききー びゅー ひゅーひゅー | 第16場面 しゃらしゃら きゅーん くわくわ ぼーぼー ちょぼん |

(表2) クラスBのオノマトペ (下線筆者)

| | |
|---|--|
| 第1場面 さわさわ <u>ちゅんちゅん</u> ざあー びゅっびゅっ ひゅーっ | 第2場面 さわさわ <u>かあかあ</u> すーん さー さらさら |
| 第3場面 びびびびっ しやーがらっ びよびよ がたんごん ぶっぶー | 第4場面 ぶろろろろ ききーっ こつこつ ぶーん ざわざわざわ |
| 第5場面 びよびよ <u>ちゅんちゅん</u> さわわ どおー くおーん しやーがちゃ | 第6場面 ばー ばしやん がたごと さわさわ がやがや わんわん |
| 第7場面 さあー ざわざわ しやわしやわ かさかさ ざっくざっく | 第8場面 <u>びびび</u> ふわーん さわさわ ぶーん きききき |
| 第9場面 さわー ざぶーん しゅわー ひゅー ぽっぽっ | 第10場面 かたん ぎいー すわあっ こぼこぼ べたべた |
| 第11場面 びゅーん かさかさ さらさら すーっ ざざーん | 第12場面 さわさわ ざー ぶーん <u>びーひよろろろろ</u> ざりざりざり |
| 第13場面 ざざーん びゅーん ざばーん とんとんとん くうーくうーくうー | 第14場面 みーんみーん さー そよそよそよ ぶろろろろ ばたん |
| 第15場面 ぶあーん たたたたたっ ききー びゅー ひゅーひゅー | 第16場面 しゃらしゃら きゅーん くわくわ ぼーぼー ちょぼん |

声」をオノマトペにしたものである。いずれにも1場面と5場面に「ちゅんちゅん」が書かれたため、発表練習前にどのような鳥が、どこで、どのように鳴いている「ちゅんちゅん」なのか、ということを考えるよう示唆した。すると、どちらのクラスにおいてもそのオノマトペの発声の仕方が全く違い、工夫が見られた。

学生たちは、「絵本が本当に立体的に感じられて、自分がその風景の中に居るようだった」「オノマトペをつけるだけでこんなに絵本の世界が変わるなんて思ってもいなかった。小さな幼児と活動したらもっと面白いオノマトペが出てくるかもしれない」「絵本にオノマトペ(BGM)をつけるなんて初めてだったけど、とても楽しかったし、いろんな場所に行けた感がすごかった」など普段見聞きしているような風景からの音を想像することの楽しさを味わい、無意識に聞き流している普段の音を意識して言語化することの難しさを同時に体験できたと考えられる。

第5・6・7回授業内容から

(1)『ごぶごぶごぼごぼ』駒形克己作 福音館書店を読む。

①全10場面を声に出して読む。

- ②感じたことを書きだす。
- ③もう一度②で感じた事を表現しながら読む。
- (2) 絵本の読み取りを学ぶ
 - ①教科書^{vii}を用いて、絵本「ごぶごぶごぼごぼ」に出てくる音・色・形の読み取り方の一例を学ぶ。
- (3) 前回までの授業で行ったことを復習しながら、ワークを用いて自分たちのオリジナルストーリーを考える。
 - ①音・色・形の持つイメージを考える。
 - ②空間の持つイメージを考える。
 - ③ストーリーを考える。
- (4) 絵本から飛び出す。

これまでワークを用いて考えてきた絵本「ごぶごぶごぼごぼ」の各場面から飛び出して身体を使って、本文のオノマトペを唱えながら動いてみる。
- (5) 考えたストーリーにあった表現をする。

自分たちの動きが、グループごとに考えたストーリーの流れに沿ったものになっているか確認をする。
- (6) 各グループで紹介文を作成し、他グループに、工夫した点、苦勞した点、見どころなどを紹介する。
- (7) 発表する。発表を終えた後は、振り返りシートを記入する。

〔授業内容の分析と考察〕

この課題に取り組むまでに学生たちは、①呼吸法を体験し、発声について深めた。②よく使用する言葉を通して言葉に高低があることを意識した。③方言など地域によっても言葉の高低が異なり、それぞれで意味も異なることがあることを意識した。④ひらがな一つにも音に対するイメージがあり、その行の持つ雰囲気があることを再認識した。⑤絵から感じた音をその空間との関係性の中で言語化しようとした。

このような体験、経験を経て絵本「ごぶごぶごぼごぼ」を用いて、絵本から飛び出し全身で絵本の世界を表現へつなげる活動を試みた。

最終発表に向けてグループに分かれて各々が絵本「ごぶごぶ ごぼごぼ」に対して感じたこ



(写真3) 何度も動きの確認をする姿

とを話し合い、自分たちのイメージに合うストーリーを考えたと。グループは9名から10名で構成されるため、イメージの方向性が定まるまでにかなりの時間を要するグループもあった。時間をかけて考え抜いたものであるからこそ(写真3)のように何度も動きを確認して発表に備えることが出来たようだ。

活動を通して、「この絵本にあまり興味もなくて、ストーリーを考えるとつまづいてしまっていて、何だかつまんないと思っていたけど、グループのメンバーの想像を聞いてると楽しくなって最後は自分が主人公になった」「絵本から飛び出す体験も初めてだったけど、めちゃくちゃ楽しかった」「オノマトペしか出てこないのに、具体的にストーリーを考えて動いたり読んだりするだけでこんなに生き生きとするんだ！と本当に楽しめた」「0, 1, 2の絵本でなんでこんな事するんだろうと思ったけど、ストーリーを考えると読みやすいし、ただの丸(円)が楽しそうに見えたり、悲しそうに見えたりした。不思議だ」など感想には一様に「なぜこんなことを」という思いが記されていたが、実際に体験してみると「表現したい」という思いがあふれだしてきている様子が見て取れた。

写真4は、2015年の発表時の写真である。〈ひらいたひらいた〉の遊びから着想を得た動きであった。写真5は、2014年の発表時の写真である。こちらは〈なべなべそこぬけ〉の拡大版から着想を得た動きであった。このように幼



(写真4) 普段の遊びから着想を得た動き 1



(写真5) 普段の遊びから着想を得た動き 2

少時代に遊んだ遊びの中からその動きの着想を得て、自分たちのストーリーにあった形で応用する姿が見られた。

また、特記すべきは、これまで2013年から2019年まで7年間「絵本から飛び出す」表現を試みてきたが、一つとして同じストーリーがかけられることがなかった。このことは、本単元の目標である、絵本の中の音、色、形を楽しむことにつながっており、豊かで自由な各人の表現が絵本から飛び出し、全身を使って表現する体験を促し、同時に自己の中でその表現しようとする試みが新しい自己の発見へとつながっていくものと考えられる。

3. まとめと今後の課題

7年の間同授業において、どのような方法で、学生個々の表現力を引き出し、育んでいくこと

が可能か模索してきた。

まず、受講生各自が「自己の表現能力」に気づけるように、「呼吸法」を用いて普段の無意識に気づき、それらを意識的に変えられるような活動を行った。このことによって、「自己表現」への発見の入り口に立てた。次に、自分が普段発している「言葉」の高低や抑揚に着目し、絵本を教材に用いて、ここでも無意識に気づき、意識的に言葉を発することあるいは、絵本を読むことへ活かせるワークを行った。その後、絵本に出てくるオノマトペや音、色、形に着目して、日常環境から聞こえてくる音をオノマトペに変換したり、オノマトペの背景を考えたりして無意識に聞いていた「音」を意識的に変えた。それらの総まとめとして、オノマトペだけが使用されている絵本を教材にして、グループでそれぞれのストーリーを考えて、それに合わせた動きに置き換えてグループ発表を行った。このように連続して行う総合的な表現活動の育みへの試みは、絵本を用いることによって、「絵(絵画)」、「音」、「言葉」を駆使した有効的な教材であることから、普段の無意識な面に気づきそれらを意識的に変えていける活動に有効なものとなった。

しかしながら、履修生たちにとって、「呼吸法」や表現の教材としての「絵本」と向き合うことは、初めての経験であり、これまで身に付けてきた慣習感覚から中々抜け出せずにいることもある。

今後、履修生が現場で子どもたちの豊かな感性の表現を育む保育者養成課程におけるプログラムとして、各自が確立し、発展させていけるようになるには、履修生それぞれが五感を通して自己と向き合い、表現活動へ繋げていかなければならない。そのためには、これまでの履修生の個々の育ちや環境、経験などから生まれる表現へも幅を広げて授業内容や発問を今後も検討していきたい。

〈註〉

- i 山野てるひ・岡林典子・ガハブカ奈美「音楽と造形の総合的な表現の可能性」―「保育内

- 容指導法（表現）」の授業における試み—
『京都女子大学 発達教育学部紀要』第5号
p. 121
- ii 後路好章著「絵本から擬音語 擬態語ぷちぷち
ちぼーん」アリス館2009年第2版 pp. 72—
74
- iii 山野てるひ・岡林典子・水戸部修治編著
『幼・保・小で役立つ絵本から広がる表現教
育のアイデア』—子供の感性を豊かに育むた
めに—2019 第2版 pp. 160—163 第Ⅱ章
—8 ガハブカ奈美 / 山崎菜央では、絵本「ぼ
ちぼちいこか」を用いて、小学第5学年に音
楽科・国語科・社会科のクロス教育を試みた
ものである。
- iv 同上書 pp. 40—43 第Ⅱ章—5 ガハブカ奈美
/ 山崎菜央では、絵本「ぐぎがさんとふへほ
さん」を用いて、小学第1学年に音楽科・国
語科のクロス教育を試みたものである。
- v 同上書 pp. 152—155 第Ⅱ章—6 ガハブカ奈
美 / 矢追博美では、絵本「あいうえおうさ
ま」を用いて、小学第1学年に音楽科・国語
科・図画工作科のクロス教育を試みたもので
ある。
- vi 同上書 pp. 124—127 第Ⅱ章—6 ガハブカ奈
美 / 山崎菜央では、絵本「あさになったので
まどをあけますよ」を用いて、小学第5学年
に音楽科・国語科のクロス教育を試みたもの
である。
- vii 山野てるひ・岡林典子・鷹木朗編著『感性を
ひらいて保育力アップ! 「表現」エクササイ
ズ&なるほど基礎知識』明治図書 2013
pp. 86—89

